

ハムレット試論

中 条 和 夫

先年 Shakespeare をはじめて読む学生三十人ばかりに *Hamlet* を読ませて、その感想を書いてもらった。一切参考書を読まないようにという注文をつけておいたのだが、出て来た感想文をいろいろしてみるとなかなか面白い。細かい点に関する異同は無視して、一語で題をつけてみると、melodrama にはじまって、heroism, demonism, pessimism, existentialism, revolution aborted, とまさに十人十色である。何もこういう例をひくまでもなく、*Hamlet* 解釈の歴史はまさに critics disagree で、かつての Eliot のように失敗作ときめつける批評家から、Shakespeare の傑作の一つにかぞえる批評家にいたるまで、およそ正反対とも思われる解釈・評価が肩を並べていても、あまり不思議に思われないのがこの作品である。

こういう傾向は作品全体の評価にとどまらない。当然のことながら、一語一語の意味からはじまって、一つのせりふ、或は各シーンの意味にいたるまで、これほど異論が続出する作品も少ない。Dover Wilson は *What Happens in 'Hamlet'* の Epistle Dedicatory の中で、“before I could write this book I had to qualify myself by settling the text of *Hamlet* and by wrestling with the meaning of every word and sentence.” と書いている。Wilson は *The MS of 'Hamlet'* と、自から校訂した New Cambridge *Hamlet* においてこの言葉を実行したのだが、それで *Hamlet* の ambiguity とか obscurity がすべての読者に納得できるものになったわけではない。心理的 realism の観点から劇を合理的に割切ってみせようとする Wilson にとっては、例えば、

Opheliaをおとりに用いようとする Claudius と Polonius の密談を Hamlet は立ち聞きする必要があったが、これを排する人々にとっては、nunnery scene で Hamlet と Ophelia のやりとりするせりふの一語一語は自から Wilson の解釈とはちがったひびきを持ち、この場面全体が強烈な dramatic irony となって迫って来る。

こういう場面で我々が感じる Hamlet の実在感とは、彼の行動が心理的に自然であるということから出て来るものではない。学生時代に見た Olivier の *Hamlet* では、nunnery scene で観客のすすり泣きが聞えたのを覚えているが、Ophelia のために流す涙が Hamlet のために流す涙と両立しないわけではない。あの映画のように、「立聞き」という設定を行って、Hamlet の行動を合理化してみても、この場面における彼の Ophelia に対する態度が自然に見えたり、正当化されたりするはずはない。重要なことは Hamlet の中に二つの全く相反するものが存在するという事実と、その二つを極限まで押しつめることができる demonic な力があるということであろう。Hamlet の言葉の中に充満している irony, satire, そしてしばしば指摘される彼の道化的要素は、本来合理的な説明を拒否しながら、しかも烈しい実在感となって我々に訴えて来るのである。こういう ambiguity を objective correlative の欠如として失敗作ときめつけるか、或は ambiguity を ambiguity として受入れて、それにもかかわらず我々に訴えて来る実在感、統一感を探るか道は二つに一つということになる、私はむしろ後者をとりたい。

Ambiguity ということだが、例えば、問題になる或る語について、その個所で可能と考えられる O. E. D. があげるいくつかの語義を全部含蓄していると考えても、これはあまり意味はない。多義性は多義性なり何らかの劇的必然性を持たない限り、劇は曖昧模糊たる言葉の羅列になって、あの Hamlet の実在感は浮かび上って来ない。“To be, or not to be . . .” にはじまる Hamlet の所謂第四独白というものがあって、この解釈については批評家の意見が大きい

に別かれるところであるが、大まかにいって、ここで Hamlet は自殺を考えているとする説と、復讐行為を考えているとする説に大別できよう。それでこの独白が自殺と復讐行為の両方を考えているといってみても、それはどちらか一方に断定するのと同じくらい無意味なことである。両方に関する思考がこの独白に顔を出しているのは誰がみても明白な事実だからである。“When he himself might his quietus make / With a bare bodkin;” は明かに自殺であろうし、“Thus conscience does make cowards of us all” は或は自殺の決意が鈍ることかも知れないが、次の “And thus the native hue of resolution / Is sicklied o’er with the pale cast of thought,” に至ってはとても自殺の決意に関する思考とは思われない。例えば III, IV, 127—30 の “Do not look upon me, / Lest with this piteous action you convert / My stern effects, then what I have to do / Will want true colour, tears per chance for blood,” に見られる image の流れとくらべてみても、両者の類似性はこれが復讐行為に近いものに関する思考であることを示している。更に “And enterprises of great pitch and moment / With this regard their currents turn awry, / And lose the name of action . . .” に至っては、復讐を超えたもっと大きい行為について逡巡しているとしか受取りようはない。こういう ambiguity を含みながらこの独白が持つ統一感を支えているものは一体何であろうか。

独白の第一行 “To be, or not to be” は「生か死か」と訳して大きいあやまりはないと思うが、はじめにこういう二者択一がある。Hamlet は先ず “to be” の世界をとりあげて “Whether ’tis nobler in the mind to suffer / The slings and arrows of outrageous fortune, / Or to take arms against a sea of troubles, / And by opposing, end them.” と独白する。ここにも二者択一がある。そしてこの択一が行われない限り Hamlet は “to be” の世界をえらぶことはできない。彼の思考はここでとぎれる。思考はとぎれるけれども image の流動はなめらかに続く。not to be → end them → to die → to sleep と。こ

うして彼の思考は“not to be”の世界にさぐりをいれようとする。それは“to sleep”か“to dream”の世界である。もし前者なら、“’tis a consummation / Devoutly to be wished to die to sleep!”ということになる。もし後者なら死後の世界でみるかも知れぬ夢への不安が人間を生に執着させる。死によって脱ぎ捨てることができるのはこの空蟬の身体だけであって、永遠に続く不安な夢があるかも知れない。Hamlet がたしかめたいのは“the dread of something after death, / The undiscovered country, from whose bourn / No traveller returns,”の実体である。その実体がたしかめられぬままに彼の思考は惨憺たる“to be”の世界へ戻って行く。そこでは決意の血の色は青白い思考の色にぬりつぶされ、乾坤一擲の大事業はあらぬ方にそれて、行為の名を失ってしまう。Hamlet の生の世界は死の世界によって規定されているようである。そしてその死の世界も、現に Hamlet が生きている生の世界の延長上にぼんやりとひろがっているようである。死は felicity ではない。こういう生と死の交錯する中に微妙な平衡を保ちながら Hamlet は存在している。その存在の軽業師に似た緊張感が、Hamlet の実在感となって我々に訴えるのである。

この独白を行う Hamlet には自己の存在の緊張はあっても、その意味の把握はない。それがこの独白に曖昧さを生じる理由である。例えば第二行で“Whether ’tis nobler in the mind...”と問いかけた時の Hamlet は、相反する二つの生き方の価値判断を行おうとする積極的な姿勢を見せている。価値に関する言及は“enterprises of great pitch and moment”なる言葉に再び現われるが、これはすでにとるべき進路からはずれ、行為の名を失った栄光に過ぎない。この二つの姿勢をつないでいるのは、生が死を、死が生を規定して二者択一を許さぬ vicious circle である。この vicious circle をやぶって判断を下すための標準は Hamlet 自身の存在の意味の把握である。Hamlet にはそれがない。それにもかかわらず彼は判断を求めて執拗に堂々めぐりを続けるのである。“Thus conscience does make cowards of us all”の conscience なる言

葉の意味が曖昧なのは当然である。それは Hamlet が判断を求める執拗な力という意味では reflection, consciousness を意味し、その判断が彼に自己の存在の意味の把握を迫るという点では、O. E. D. や D. G. James などのいう倫理的な意味を持つ判断である。

Hamlet の言葉の曖昧さは、彼が常に相反する二つの立場の二者択一を迫られながら、判断の根拠ともいべき自己の存在の意味、self-identity を喪失していることに原因がある。こういう Hamlet の存在の仕方はこの劇に彼がはじめて姿を現わした時から明白である。“A little more than kin, and less than kind” といい、“I am too much in the son (sun)” というのはじめて Hamlet の口をもれる言葉は、後の彼の言葉に終始あらわれる鋭い irony を含んでいる。O. E. D. は irony を定義して、“A figure of speech in which the intended meaning is the opposite of that expressed by the words used” とのべているが、これは少々機械的に割切り過ぎた定義であろう。表現された意味の反対が本当の意味であることがはじめからわかっているなら、それはもう irony ではない。少くともいささか陳腐な irony ということになるであろう。irony の定義としては Middleton and Rowley の *The World Tost at Tennis* に出て来る Scholar の言葉が面白い。彼は仕立屋の商売にかこつけて、いろいろな figure of speech を面白く説明しているが、その中で irony についてはこういっている。

By his needle he understands ironia,
That with one eye looks two ways at once,

irony は一人の人間が同時に正反対の二つの立場を表明することができる figure of speech である。正反対の二つの立場に足をかけて、微妙な平衡を保っている表現が irony であって、その平衡がきわどければきわどいほど、irony は鋭さをますことになる。Hamlet の irony は実はこういう irony である。

喪服をまとして華やかな宮廷の場面にはじめて姿をあらわす Hamlet の立場

は微妙である。Claudius は uncle-father であり、Gertrude は aunt-mother である。Hamlet 自身は尊敬する父王 Hamlet の子であり、父の弟との早過ぎた結婚により汚された母の子であり、更に Claudius の名目上の子である。こういう複雑微妙な関係の一つを自己の存在の根拠としてえらび、他をすべて切捨ててしまうことができぬままに、Hamlet は交錯する関係の中心に存在している。その意識の表現が “A little more than kin, and less than kind” であり、“I am too much in the son (sun)” である。

Claudius はこういう Hamlet に対して、一つの択一の機会をあたえる。

... for let the world take note
 You are the most immediate to our throne,
 And with no less nobility of love
 Than that which dearest father bears his son,
 Do I impart toward you...

勿論 Hamlet はこの提案を受入れようとはしない。彼の conscience はこういう、うわべの糊塗、“actions that a man might play” でごまかされるほど鈍いものではないからである。

彼の conscience はむしろ「汚れた母の子」という関係をたどりはじめる。母の汚れは Hamlet 自身を汚し、“O, that this too too sullied flesh would melt, / Thaw and resolve itself into a dew,” という自殺への希求となって第一独白に表われる。汚れは更に拡大されてこの世界は Hamlet の目には雑草のおいしげるにまかせた庭園としかうつらない。ただこの独白を自殺への希求とのみとるのはあやまりである。ここには亡き父への追憶がある。“So excellent a king, that was to this / Hyperion to a satyr,” とか “My father’s but no more like my father / Than I to Hercules,” などの言葉は彼が「先王 Hamlet の子」という関係を問題にしていることを示唆している。更にこの独白全体の諧調は最初の 8 行半を除いて、自殺の希求とは裏腹な正当な悲しみと怒りの感

情にあわせられているようである。Hamlet は両立できない二つの立場に足をのせたまま口を閉じなければならない。

こういう状態にある Hamlet に対して、存在の根拠をえらぶ第二の機会が亡霊によって提供される。彼はそれにとびついて行く。“I'll call thee Hamlet,/ King, father, royal Dane. O, answer me!” と呼びかける Hamlet の亡霊に対する態度は亡霊そのものの identity を疑っている Horatio, Marcellus の態度とはっきりした対照を示している。彼等は自己の存在の根拠を疑っていないという点で正常な人間である。一方、ややもすれば足場を失いそうになる複雑微妙な関係の中心にある Hamlet は King, father, royal Dane と亡霊に呼びかけることによって、自己の存在の根拠を把握しようとしているのである。亡霊が呪われた魂なのか、天よりの使者なのか、或は地獄の毒気を送り込むものなのか、そういうことはこの言葉を発した時の Hamlet にとっては問題ではない。Hamlet は肉体の制約にもてあそばれる道化的な生の中に、“Thoughts beyond the reaches of our souls” におののきながらも、その thought の実体を把握することに自分の存在をかけようとするのである。ここには第一独白に見える自殺への憧憬はない。

Why, what should be the fear?
I do not set my life at a pin's fee,
And for my soul, what can it do to that
Being a thing immortal as itself;

Hamlet の conscience は亡霊の一点に集中して、あらゆる他の曖昧な関係を切り捨てようとする状態にある。Hamlet 自身が経験している魂の実感がある。

My fate cries out,
And makes each petty artery in this body
As hardy as the Nemean Lion's nerve.
Still am I call'd. Unhand me, gentleman.
By heaven, I'll make a ghost of him that lets me!

暗闇の中から運命の声が Hamlet を呼んでいる。彼はその呼び声に自己の全存在をかけようとする。ここには決断があり、生き生きとした生命感がある。“thy commandment all alone shall live . . . unmix'd with baser matter” と決意をのべる時、Hamlet の進むべき方向は決定したようである。

Dover Wilson はエリザベス朝・ジャコビアン期の Protestant や Catholic の亡霊に関する見解とか、或は当時の demonology を援用して、Hamlet 及び当時の観衆がいだいたと思われる亡霊の identity に関する疑惑を指摘し、亡霊の真実性の証明がこの劇の第三幕までの重要な plot になっていることを明かにした。それは正しい。しかしそれは Hamlet の探偵趣味や穿鑿癖を示すものではない。少くとも一幕四場、五場に見える Hamlet には亡霊の言葉に対する疑惑はない。“Be thou a spirit of health or goblin damn'd, / Bring with thee airs from heaven, or blasts from hell, / Be thy intents wicked or charitable,” とか “And shall I couple hell” などの言葉は第三独白の “The spirit that I have seen / May be the devil” への伏線とはなり得ても、この場面で Hamlet が亡霊に対する姿勢を示しているということではできない。亡霊の言葉という剣で複雑な関係という Gordian Knot を一刀両断に整理してしまうとする決断がこの場面の Hamlet の姿勢である。亡霊の言葉は彼の胸にきざまれて、それは彼に復讐を要求する。

Hamlet が復讐を実行するにあたって二つの問題がある。一つは果して亡霊の言葉が真実であったかということ、つまり Claudius が父王 Hamlet を殺害し、又 Gertrude と近親相姦を行っていたということが事実と相違ないかということであり、今一つは Hamlet 自身の存在の意味と密接な関係がある復讐行為の意味ということであろう。前者に関して Hamlet がいささかの疑惑を抱いていたとは少くとも私には読みとれない。問題は後者である。この劇のはじめから Hamlet がぼんやりとした形で予感していた母親の汚れと、自己の汚れは、亡霊の言葉によって父王在世中からの incest を匂わすもっともおそろし

い形で明かにされた。それはただちに Hamlet にとって一番重要な問題である自己の存在の意味に投影する。“Hamlet, king, father, royal Dane”と亡霊に呼びかけることによって行った Hamlet の自己存在の確認は、再び「汚れた母の子」という関係と同列におかれてしまう。二幕二場に見える“*For if the sun breed maggots in a dead dog, . . .*”などの Polonius への謎めいたせりふや、Rosencrantz, Guildenstern に対する“*I have of late, but wherefore I know not, lost all my mirth,*”にはじまる有名なせりふはそういう Hamlet の意識の状態を示すものである。

ここで少し Hamlet の意識の内部に立入ってみよう。さきにのべた「先王 Hamlet の子」とか「汚された母の子」などの関係は、きちんと分類されて、Hamlet の心の抽斗におきめられているわけではない。それは、Hamlet の思考が一方の関係をたどりはじめると、必ず他方が自己主張をはじめるという意味で、分化されないままに共存している意識である。例えば、“*What a piece of work is a man, . . .*”にはじまるルネッサンスの人間礼讃のひきあいにはしばしば出されるせりふは、“*and yet to me, what is this quintessence of dust? man delights not me, no, nor woman neither,*”という言葉をはき出す prologue なのである。こういう Hamlet に共存する意識は Shakespeare によって、或る時は時間的に継起するせりふの波の形で表裏の関係に、或る時はすでにのべた irony の形で統一的にとらえられているということができよう。

互いに相矛盾する意識の共存は一方に復讐行為の遅延という現象を生み、一方に復讐行為へのはげしい意欲を生む。現象と意欲の乖離は焦燥感となって第三独白に現われる。“*rogue,*” “*peasant slave,*” “*dull and muddy-mettled rascal,*” “*John-a-dreams,*” “*coward,*” “*villain,*” “*ass,*” “*very drab,*” “*stallion,*” これらは Hamlet が自分をののしる言葉であるが、しばしばいわれるように、「汚れた母の子」という関係をたどる Hamlet の自己嫌悪感のみを表現するものではない。それはえらぶことができないままに袋小路に押しつめ

られた者の焦燥感である。こういう Hamlet に天啓のようにひらめくのが劇中劇のわなをしかけて、Claudius の conscience をとらえようということである。ここに Hamlet が冒した一つの誤算がある。彼が仕組もうとするわなは Claudius と Gertrude の犯罪事実、すなわち、彼が今まで何の疑惑もいっていないかった事実の再確認にはなるであろう。そして或は復讐行為への spring board となるかも知れない。しかし、彼の行動を阻害しているもっと根本的な自己の存在の問題、かつて彼が King, father, Royal Dane と呼び、そして今又この独白の最後で問題にしている亡霊そのものの identity に関してどのような解答を与えてくれるだろうか。

The spirit that I have seen
May be the devil, and the devil hath power
T'assume a pleasing shape, yea, and perhaps
Out of my weakness and my mealancholy,
As he is very potent with such spirits,
Abuses me to damn me;

という Hamlet の疑惑に対して果して、“grounds more relative than this” を与えてくれるだろうか。

ここで例の “To be, or not to be...” なる独白をふりかえってみよう。自殺と復讐の二つに関する思考がここにあるとききのべたが、それは第一独白に見える Hamlet が肌に感じている腐敗とけがれを伴った自殺への憧憬や、第三独白に見える烈しい自己嫌悪感を伴った復讐への情熱とは全く異なった静かな調子を持っている。personal なものは impersonal なものに、具体的な嫌悪感と情熱にいろどられた自殺と復讐の問題は形而上的な生死の問題におきかえられている。この独白と劇中劇の間に nunnery scene と、Hamlet の Horatio の人格に対する憧憬のせりふがある。前者は「汚れた母の子」という Hamlet の存在の問題を Ophelia との関係において再び明かにするものであり、後者は Hamlet の問題が自己の存在の根拠にかかわる問題であることを Horatio の人

格の統一感への憧憬という形で明かにするものである。亡霊の言葉が真実か否かをたしかめようとする melodramatic な劇中劇のすじ立は、Hamlet にとっては亡霊そのものの identity を明かにし、自己の存在の根拠を確認しようとする行為の代償行為であったのである。

if his occulted guilt
Do not itself unkennel in one speech,
It is a damned ghost that we have seen,
And my imagination are as foul
As Vulcan's stithy;

Hamlet の論理は明瞭である。しかしたとえ Claudius の罪悪があかるみに出たとしても、亡霊は矢張り悪魔のしわざであり、Hamlet の想像は Vulcan の鍛冶場のように汚れている可能性はある。

劇中劇における Hamlet の行動は見事である。舞台のあらゆるものは Hamlet の手にあやつられる人形である。ただその人形は生身の人間であって、何度か仕組んだすじ書きからはみ出して、計画の失敗の不安を Hamlet にいだかせるが、彼はよくその緊張にたえて、遂に王の conscience をとらえることに成功した。“I'll take the ghost's word for a thousand pound” という Hamlet は亡霊を自己の存在の根拠として確認したのである。第三独白に見た生と死の交錯の間にきわどい平衡を保って存在していた Hamlet はここにはじめてしっかりした足場を得たわけである。ただその得たところの足場は死の世界であった。亡霊は Hamlet に真実を告げたという意味では生の世界に属する。だがそれが死の世界よりの使者であることにも間違いはない。劇中劇の成功の直後の Hamlet の高揚感に対して Horatio の言葉はそっけないほど即物的である。“Very well, my lord.” “I did very well note him.” と。Horatio は亡霊の言葉が真実であるということだけを見届けたのであり、Hamlet は亡霊に自己を identify したのである。こういう意味で亡霊の存在そのものがこの悲劇を構成

するもっとも鋭い dramatic irony であるといえよう。

死とかたい握手をした Hamlet はもう普通の意味での人間ではない。彼は amoral の世界に足を踏み入れたのである。だから人間的標準から劇中劇以後の Hamlet の言葉や行動を判定する時、それは stage-villain のそれに近いものになる。

'Tis now the very witching time of night,
When churchyards yawn, and hell itself breathes out
Contagion to this world: now could I drink hot blood,
And do such bitter business as the day
Would quake to look on:

こういうせりふは当時の conventional な復讐劇の主人公の口をもれたとしてもそれほどおかしくはない。ただ「今は魔の時、墓があぎとを開き地獄が毒気をこの世に送る時」と独白する Hamlet を他の conventional な主人公から区別するところのものは、彼には復讐行為の意味の認識があるという点である。それは「白日も目をおおう惨忍な所業」である。更にそういうおそろしい認識を超えて、復讐を行おうとする demonic な力がある。

こういう魔神にも似た Hamlet に対して、Shakespeare はキリスト教の立場から comment を行うことを忘れない。それが次の prayer scene である。この scene の Claudius は完全にしらふであり、まじめであり、敬虔である。

What if this cursed hand
Were thicker than itself with brother's blood,
Is there not rain enough in the sweet heavens
To wash it white as snow?

こういう mercy と sin の見方は *The Merchant of Venice*, *Measure for Measure* をへて *The Tempest* に至る Shakespeare に一貫して見られる見方である。Claudius は常に生の側にあって、生の中で悔悟しながら罪の許しを願

っている。彼のこの祈りは一見功利的に見えるけれども、実はキリスト教の慈悲とか愛の本質を無意識のうちについているのだといわねばならない。

Help, angels! Make assay,
Bow stubborn knees, and heart, with strings of steel,
Be soft as sinews of the new born babe—
All may be well.

とつぶやいてひざを折る時、彼の祈りはききとどけられたといってよい。事実この祈りはこの場面の Claudius の命を救うのである。

一方 “Now might I do it pat, ... / That would be scann'd” と、もっとも残酷な意味での復讐を思いめぐらす Hamlet の言葉には死の匂いが充満している。亡霊の罪に苦しむ姿が obsession となって、Hamlet の思考の方向を支配する。この場面の Hamlet を支えているのは、キリスト教が禁じる vengeance を私しようとする moral villain をはるかにこえた魔神的な衝動であるといわねばならない。

寝室の場面に見られる Hamlet の態度には「汚れた母の子」と「父王 Hamlet の子」の二つの相いれない関係の間に動揺する風はない。前者は烈しい性への嘔吐感となって Hamlet が母親を責める言葉を充たすが、それが彼の存在の根拠をゆり動かしはしない。死と握手をした彼の言葉にはキリスト教的な慈悲はない。冷たい煉獄の炎にも似た非難の言葉が Gertrude を責めたてるだけである。彼の母親に対する態度は

Forgive me this my virtue,
For in the fatness of these pursy times
Virtue itself of vice must pardon beg,
Yea curb and woo for leave to do him good.

であり、誤って Polonius を刺殺したことに対する彼の感懐は、

heaven hath pleased it so,
To punish me with this, and this with me,

That I must be their scourge and minister.
I will bestow him and answer well
The death I gave him; so, again, good night.
I must be cruel only to be kind.

である。Hamletは自からを「神のふるう筈、神の代理者」に擬する。勿論ここには未だself-righteousな態度が残っているけれども、同時に、「自分がPoloniusを罰し、Poloniusが自分を罰することになる」という認識がある。母親の寝室を出て行くHamletには何か今までとは違った明かるさがある。Rosencantz, Guildensternに言及して“*They must sweep my way / And marshal me to knavery: let it work, / For 'tis the sport to have the enginer / Hoist with his own petar...*”というが、これは陰謀に対するに陰謀を以ってするvillainのやり口ではない。彼は王の英国へ行けという命令に何のさぐりを入れることもなく易々として従う。しばしばHamletの復讐遅延のひき合いに出される最後の独白にしても、例えば第三独白に見られるような烈しい自己嫌悪感はない。ここにあるものは眼前を堂々と進軍して行くFortinbrassの軍勢の生命感への憧憬である。生を超えた彼方の死と握手したHamletは自分に残された生を充分に生きようとしているようである。“O, from this time forth, / My thoughts be bloody, or be nothing worth!”はそういう決意の表明である。“Remorseless, trecherous, lecherous, kindless villain! / O, vengeance”という叫びと表面は同じであっても、それを支えるHamletの本質はかわっている。後者はClaudiusに対する憎悪と自己嫌悪感にさいなまれるHamletの神経質な叫びであり、前者は自己の存在の根拠を把握した者がもつ落着いた決意である。復讐は必ずなる。“Readiness is all”である。だからHamletは何の不安もいなくClaudiusの計画に身をゆだねることができる。

Hamletの海上における経験は彼のこういう生き方を更に不動のものとし

た。Claudius の陰謀に対する反撃は、Horatio に対する言葉の中で次のように語られる。

Sir, in my heart there was a kind of fighting
That would not let me sleep—methought I lay
Worse than the mutines in the bilboes. Rashly,
And praised be rashness for it...let us know
Our indiscretion sometimes serves us well,
When our deep plots do pall, and that should learn us
Ther's a divinity that shapes our ends,
Rough-hew them how we will—

ここには “some craven scruple / Of thinking too precisely on the event” は全く影をひそめている。予測しなかった海賊の襲撃に対しても、Hamlet は最も勇敢に立ち向かって、その結果、運命の導くままに、再び Denmark の土を踏むことができた。彼がかつて Horatio に呈した讃辞 “A man that fortune's buffets and rewards / Hast ta'en with equal thanks” はそのままこの時の Hamlet のあり体を語るものであろう。

墓掘りの場に再び現われる Hamlet にはかつて彼がいだいた「未知の国への不安」はない。彼はおそれることなく死を直視することができる。Hamlet の自己存在の根拠の把握は完全である。だから彼は今度は亡霊を介することなく “This is I, / Hamlet the Dane.” と叫ぶことができる。

Laertes の挑戦を彼は迷うことなく受入れる。Horatio の忠告にもかかわらず、胸に感じる一抹の不安は Hamlet の覚悟をゆさぶることはできない。

There is special providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis not to come—if it be not to come, it will be now—if it be not now, yet it will come—the readiness is all.

これが最後の fencing scene にのぞむ Hamlet の言葉である。こうして彼の復讐行為は完成する。しかし、それは人間の勝手気ままな正義への欲望の充足で

はない。Hamlet は神のふるう筈であり、神の代理者である。彼はその役割に殉じて毒をぬった Laertes の剣に倒れる。死は felicity となって Hamlet の魂をつつむ。

Eliot は *Hamlet* についてこういっている。「Hamlet が直面している困難は彼の嫌悪が母親によっておこされたものでありながら、母親はそれを支えるに足る十分な対等物でないということである。彼の嫌悪は発展して母親を超えてしまう。だからそれは彼が理解できない感情である。彼はこの感情を客観化することができない。そのためにこの感情は彼の生命を毒し、行動を阻害する。どのような行動もそれを満足させることはできない。そして Shakespeare もどのように筋立について骨折ってみても、そういう Hamlet の感情を表現することはできない」と。Hamlet を専ら Gertrude との関係においてのみ問題にする限り、たしかにそのとおりであろう。Hamlet がいだいた嫌悪感は、たしかに、平凡な女性である Gertrude を対等物とするにはあまりにも大きく、複雑な感情である。しかし、そういう感情を Hamlet の中に発展させ、母親を超えるものにした力は一体何であろうか。亡霊は先王の生前そのままの甲冑を身にまとい堂々と Hamlet の前に現われる。それは近代人の神経の衰弱が生み出した実体の定かでない幽霊ではない。Hamlet にとっては King, father, royal Dane である。烈しく感じ、烈しく行動する Hamlet や、第五幕のおそれることなく死を直視する彼の態度はこの父の子という意識の延長上にある。Eliot が Gertrude との関係にのみ目を向けるのは、Hamlet の中に「先王 Hamlet の子」と「汚れた母の子」という二つの相反する関係の整然と分化した意識がないからであろう。しかしそれは本来 Hamlet が生存を続ける限り分化を許さない意識である。再びふれることになるが、例えば例の人間礼讃のせりふが、ただ “man delights not me, no, nor woman neither” というせりふをひき出すためにのみ語られたとは到底考えられない。

この試論を書くにあたって、*Hamlet* 論を幾つか読みかえしてみた。それら

に負うところを一々注に示して謝意を表することは不可能である。ここでは特に興味をもって読んだ Wilson Knight の *The Wheel of Fire* の *Hamlet* 論二つと、P. Alexander の *Hamlet Father and Son* を記して責をまぬがりたい。

——関西学院大学文学部助教授——